

放送大学・面接授業で「何を」「どう」教えたか

— 19歳から91歳が学ぶ英語「再出発」 —

山田昇司（岐阜・朝日大学）

<目次>

はじめに — 半信半疑の「通知表」

1. 学習者主体のシラバスへのつくり込み
 2. 英文法の「幹」を理解する英文読解法
 3. 英音法の「幹」を体得する音読指導法
 4. 私が用紙の大きさにこだわった理由
 5. 「おいしい料理」も台無しにする言葉
 6. 授業の記録 — 「何を」「どう」教えたのか
 6. 1 「この本、注文したんですが…」
 6. 1. 1 やはり、放送大学の学生はちがう！
 6. 1. 2 「英語学習史」を語った自己紹介
 6. 1. 3 背景知識たっぷり、文法知識ミニマム
 6. 2 「でも、その日本語、なんか変です」
 6. 2. 1 つぎつぎと上がる質問の手
 6. 2. 2 受講生の「英語教師」が見たもの
 6. 3 「えー、前で発表するんですか!？」
 6. 3. 1 話せるようになって失なうもの
 6. 3. 2 E.T.にはあった「恥をかく勇氣」
 6. 4 「ここ、もう一回、歌ってください」
 6. 4. 1 意外と手強かった「民衆の歌」
 6. 4. 2 「映画の続きがみたい」に答えて
 6. 5 「母語力上限の法則、納得しました」
 6. 5. 1 日本語力と英語力の関係語る
 6. 5. 2 「センマルセン」と言うならば…
 6. 5. 3 日本語読解力に影響される英語力
 6. 6 「長く生きると辛いことも多いけど…」
 6. 6. 1 間違っていなかった映画の完全上映
 6. 6. 2 映画は「会話」ではなく「背景資料」
 6. 7 「来年もこの授業、ありますか？」
 6. 7. 1 新たな意欲を生み出す「寺島メソッド」
 6. 7. 2 さまざまな形で結実した「英語再出発」
 6. 7. 3 英語力をつける「最後の課題」
- おわりに — 私の英語「黒歴史」は終わった！

<註記>

<引用文献>

<添付資料>

はじめに ― 半信半疑の「通知表」

私は我が目を疑った。信じられなかったからだ。そこには数字の5ばかりがずらりと並んでいた。私がこんな通知表をもらったことはいまだかつて一度もない。人間、長いこと生きてるとこんなことも起きるのか。これは私が面接授業を終えて回収した「授業評価アンケート」（無記名）を見たときの正直な気持ちである。

教科書を使わない私の授業の評価項目は「シラバス」「準備」「教材」「工夫」「熱意」「理解度」「教室の雰囲気」の7つであるが、32枚のうちオール5が15枚あった。残りの17枚における5以外の評価は延べ25個で、その内訳は4が19個、3が4個、2が2個だった。この17枚の中には数字の5に花丸が付いたものまであった。

私は帰宅後、夕食もそそくさと済ませて、そのアンケート裏面の記述欄や別紙に書かれた記名感想文を読んでいった。そしてその半信半疑の驚きは次第に大きな喜びに変わっていった。というのは、次のようなコメントが次々と出てきたからだ。

「また機会があれば単位に関係なく先生の講義を受けたいです。本当に貴重な2日間をありがとうございました」

「いままで受けた英語の授業、放送大学のその他の授業の中で一番楽しかったです!! (お世辞じゃなくて!!) ありがとうございました」

「こんな楽しい授業ならまた参加したいですし、他の人にも教えてあげたいなと思いました。自分の中で眠っていた何かが、この授業をきっかけとして動き出してしまいそうです。どうもありがとうございました。本当に感動しました！」

「授業の最初からミュージカル鑑賞と度肝を抜かれた感じで始まった授業。固くなりがちな英語の講義もこの映像で一気にリラックスしました。それと同時に先生の気さくなお人柄に質問もしやすく目一杯授業に打ち込めた気がします」

「何よりもグループで取り組めたことが良かったです。面接授業はどこともなく教室に集まり講義を受けて隣席の方の顔も名前も覚えぬまま授業を終えることが多いのですが、チームワークの力を借りて発表することで交流もでき楽しく授業に取り組むことが出来ました」

「受講科目名そのままの、楽しく学んで英語を再び学んでみたくなる授業内容で、面接授業のときに時計をチラチラ見ながら時間の過ぎるのを待つという、いつもの自分からは想像できない程、ワクワクドキドキしながら（一度も時計を見ることなく）二目を終えることができました」

「先生の自己紹介もよかったです。／私は初めて「レ・ミゼラブル」について学びました。歌、リズムにのって英語に入りやすく、わかりやすく説明して下さったおかげで最後には「民衆の歌」を英語で歌うことが出来ました。先生の熱意も伝わり生徒全

員が1つにまとまった様な授業でした。文法も簡単な方法で教えてもらえました。これからもっと英語を学びたいという気持ちになりました」

もちろんコメントの中には改善点を指摘するものも数枚ありそれは後節で検討することになるが、全体としては上掲のような好意的な感想が大半を占めていた。私はそれらの感想文を胸を熱くして読んでいった。教師にとってこれほどの喜びはあろうか。

また幾人も人が二日間の授業が充実していたと述べるだけでなく「もっと学びたくなった」と表明していたことも嬉しかった。というのは、「教室を出てからも学びたくなる」ことがこの授業における私の最大の目標だったからだ。とりわけ、放送大学の受講生にとっては英語の面接授業は一年に1回か2回しか受けることはないのだから「学び続けたい」ことほど重要なことはないとは私は考えたのである。

ところがその感激の一方で、心中では後悔の念が生まれてきた。どういうことかという、受講者の顔をはっきりと思ひ浮かべられないのだ。二日目の最初に急遽作った座席表とをつきあわせてみてようやく半分くらいはわかってきたのだが、やはり全員は確認できない。初日の授業開きのときに座席表を作っておくべきだったのだ。そうすれば何回も名前前で指名するうちに顔と名前を覚えることができたのに。そのことが悔やまれてならない。二度と同じ失敗を繰り返さないためにこのことを書き留めておく。

私が担当した面接授業は2017年5月13日、14日の両日に岐阜学習センターでおこなわれたものである。科目名は「楽しく学んで英語「再出発」」。次節ではこの授業に至る経緯を2年前にさかのぼって述べていきたい。

1. 学習者主体のシラバスへのつくり込み

私が放送大学のことを知ったのは2015年6月だった。定例の会議のときに放送大学の講師がやれる人は申し出てほしいとの話を聞いたのだ。翌々日には岐阜学習センター所長の岡野幸雄先生にコンタクトを取ることができたが、先生からは「次年度はすでに決まっているので一年後に改めて相談したい」との返答だった。

私がこの授業をやりたいと思ったことにはわけがある。前年9月に『英語教育が甦えるとき』（明石書店）を上梓してそれまでの大学8年間の授業実践をまとめたのだが、その中の「レ・ミゼラブル」の授業を成人を対象にしたクラスでも試してみたかったからである。英語教育は英語で教える中身が魅力的であってこそ生きたものとなると信じる私にとって、この教材は映像と歌と物語が三位一体となった非常に優れたもので、老若男女を問わず引きつける素晴らしさを感じていたのだ。

それから1年後の6月に所長の岡野先生から2017年度前期の面接授業を担当してほしいとの依頼があった。土日の二日間で85分の授業が8コマの集中授業である。これは私にとって全く初めての授業形態であった。「何を」「どう」教えたらいいのか。シラバスは8月までに提出することがわかり私はさっそく授業デザインの検討に着手した。そうして最初に作成したシラバスが下表のA案であったが、提出後に修正すべきところが見つかり、最終的にはB案をへてC案となった。

変更の経緯を述べる。最初の案では「1日目：音声、2日目：読解」となっていたが、

これを「1日目の午前：読解、午後：音声」のように分割した。同僚の寺島美紀子先生（朝日大学教授）から「これでは一日中同じことをやることになり単調なので分けた方がいいのではないか」とのアドバイスをもらったからだ。私の当初の案は「ひとつのことを固めて集中的に学んだ方がよい」と考えたものだったが、実際にやってみた経験からもこうしたほうがよかった。学習者の立場から見ることの大切さを再認識させられた助言であった。

またこのとき寺島美紀子先生からは「『民衆の歌』の発展課題としてその歌の『終章』を持ってくるのではなく『Look Down』の対話式群読を採用したほうがグループワークをもっと楽しめるのではないか」との助言ももらい差し替えた。

こうして出来上がったものがB案であるが、その後「Look Down」は「民衆の歌」と比べると規則的に強弱のリズムを刻んでいることに気づいてC案では「Look Down」を1日目に繰り上げて行うこととした。こうすることで音声教材の配列が「易」から「難」となった。

		A 案	B 案	C 案
一日目	1	音法の話 映画	輪読 映画 文法の話	輪読 映画 文法の話
	2	♪民衆の歌	読解	読解
	3	♪民衆の歌（終章）	音法の話 ♪民衆の歌	音法の話 ♪Look Down
	4	♪民衆の歌 発表	♪民衆の歌 発表	♪Look Down 発表
二日目	1	発表会 輪読 映画	読解	映画 読解
	2	読解	読解	読解
	3	読解	♪Look Down	♪民衆の歌
	4	読解 文法の話	♪Look Down 発表	♪民衆の歌 発表

このようにして次第にシラバスは固まっていっていったのだが、実際の授業は最終的なC案とはまた少し違ったものとなった。というのは、当日の課題の進み具合や受講生の希望を聞いて変更したからである。先に評価に2や3が6個あったと述べたが、このうちの5個は「シラバスは役だったか」に関するものであった。受講者が見ていたシラバスは実際の授業とはかなり異なったA案だったのでこう評されても致し方なかったが、変更したがゆえに他の項目の評価が上がったとも言える。次の機会には今回の経験をふまえてより実態にあったシラバスを最初から作成したい。さて、次節ではこのシラバスC案に基づいて作成した教材作成について述べる。

2. 英文法の「幹」を理解する英文読解法

今回の面接授業で用いた教材は私が大学の授業で使ったものをベースにしているが、受講者の実態を考えてかなり大幅に手を入れた。どのように改訂したかを順に述べる。

まず読解プリントであるが、大学の授業では学生は記号入りのプリント見本をスマホのカメラで写して記号を自分のプリントに転写していた。しかし今回は英文にあらかじめ英

文構造を示す記号を書き入れておいた。しかもそれを赤字にして目立たせた。限られた時間にできるだけ多くの英文に挑戦してほしいという気持ちからの改訂だった。

もちろん語義についてはそのままを踏襲し、ほとんどすべて載せてある。しかもその意味は句単位のみまとまりになっている。こうすることで学習者は語順の「幹」の変換にだけ注意を注ぐことが可能になる。物語の冒頭の英文をその例として以下に示す。〔実際のプリントでは語義は右端に縦に並んでいる。資料① 13頁〕

¹ Years ago I (stole) a loaf of bread ²[to feed] my hungry family.
 何年も前に 私は 盗んだ 一塊のパン 食べさせるために 私の空腹の家族

また和訳の答えはすべて作成して別紙解答篇として当日手渡す教材冊子の中に載せた。これは定員が 60 名となっており、もしそれに近い人数が受講すれば個別に援助することはほとんど不可能だからである。最終的な登録者は 37 名（当日欠席があり実際は 32 名）だったが、それでも教師は大忙しだった。解答篇がついていても、どうしてそうなるのかが納得できない人から質問の手が上がるからである。しかし、やはりこの解答篇は無駄ではなかった。というのは、もちろんそれで自分で答え合わせをした人もいたし、中には次のような感想を書いた人もあったからだ。

まだ訳しきれない所を家に帰って全部訳してみたいと思っています。（ボキャブラリーが右端にのっててチラッと見ながらできますしね。）頑張ります。

読解プリントについては今回新たに作成したプリントが 2 枚ある。物語の読解プリントに入る前に和訳の仕方の基本を学ぶためのものである。

1 枚目（資料② 11頁）では、まず英文法の「幹」である語順の重要性を視覚的に示した。この図は寺島(1986: 11)の考え方をふまえて描いたものである。寺島氏はその中で英文法の「水源地」は語順「名詞＋動詞＋名詞」であり「まず幹、枝葉はそれから」「幹を学んで枝葉につなげる」という英語学習法を提起している。筆者もそれにならってこの読解を行おうと考えているのである。



その次には「幹」と「枝葉」の意思伝達のときの軽重を説明し、最後に語順変換のルールを 2 個 (SVO → SOV、後置修飾→前置修飾) 示している。また、添付資料にはないが、2 枚目ではその 2 つのルールを物語の内容と関わった英文で練習する問題を載せた。

なお、英語の歌についても意味をとるプリントをつけておいた。「Look Down」は「語順訳穴埋め」から「フレーズ訳」を、また「民衆の歌」は「フレーズ訳」から逆に「語順訳穴埋め」をおこなうという形態のものとなっている。ただこれは授業で使うことは想定していなかった。余裕のある学習者向けに用意したものである。

♪ Look Down

You (re) here until [you (die)]

おまえ (いる) ここ ~まで [おまえ (死ぬ)]

♪ 民衆の歌

(Do) you hear the people [sing]

(~(する)か) _____ (_____) _____ [_____]

あなたは 民衆が [歌う] のが (聞こえるか)

読解に関しては、語彙や文法(Formal Schema)を学ぶ教材だけでなく、日本語の背景資料(Content Schema)も用意した。具体的には「物語冒頭部の抜き刷り」「19世紀のフランス歴史年表」「物語全体のあらすじ」「物語の解説」といったものである。

これらは大学の授業でも用いているものであるが、「19世紀のフランス歴史年表」については今回は二色刷を採用し「レ・ミゼラブル」が描かれた時代がよりくっきりと浮かび上がるように工夫した。(資料③ 2頁) このような史実を知らなければ、ユーゴーがこの作品に込めた社会思想的主張は読みとれないし、ミュージカルで歌われている「民衆の歌」の歌詞も真に理解することはできないだろう。基本的人権はこのような闘いをへて勝ち取られてきたものだからだ。

以上で読解の教材についての説明を終え、次節からは音声教材の作成について記述する。

3. 英音法の「幹」を体得する音読指導法

音声教材については前節で紹介したようにこのミュージカルから2つの歌「Look Down」と「民衆の歌」を採用しているが、このプリントには英文すべてにリズム記号と仮名ふりがしてある。これは寺島隆吉氏(元・岐阜大学教授)が提唱する学習・教授法(以降は「寺島メソッド」と表記)においては音声指導を次のように考えているからである。

寺島メソッドの音声指導においては英文に強弱記号をつけ、単語には仮名ふりをおこなう。なぜ発音記号を教えずに、単語に「仮名ふり」をするのかというと、「仮名よみ」であっても強弱のリズムでよむことで英語らしい発音に近づけることができるからである。(中略)初めて英語を学ぶ生徒が、英語の大文字・小文字、筆記体の大文字・小文字の他に、発音記号までおぼえさせられたのでは、英語嫌いが増えるだけである。しかし発音記号を覚えたとしても、指導されたとおりの発音になるとはかぎらない。それよりも正しいリズムで英文を音読できるようになった方が、はるかに英語らしく、かつ聞き取りやすい英語になる。(山田 2016 : 214-215)

さて次に、音声指導のプリント、寺島メソッドでは「リズムよみプリント」と呼んでいるものだが、それについて述べる。これは大学の授業で用いたものをそのまま用いるつもりだったが、面接授業に先立って私の所属する研究所主宰の研究集会(註①)で偶然にも「民衆の歌」の歌唱指導をする機会があり、そのときにリズム記号に修正すべきところがある

ことがわかった。その箇所は II' 題目 3 行目の **Some** のリズム記号で強勢から弱勢に改めた。

それまで授業で何回も使っていたが学生が歌うのに苦勞していたところだった。II 題目と同じメロディの繰り返しである II' 題目が同じリズムの構造であるということに気づいていればもっと早くにこの誤りを正すことができたであろうが、内容語が弱勢になったり機能語が強勢に変わったりしてリズムに不規則性があることや、映画版とコンサート版では歌い方に微妙な違いがあることなどに目（耳）を奪われて肝心の全体構造に注意を払わなかったのだ。言うなれば、「木を見て森を見ず」の失敗だった。（資料④ 48 頁）

II	II'
Will you join in our crusade?	Will you give all you can give
Who will be strong and stand with me?	so that our banner may advance?
Beyond the barricade	Some will fall and some will live.
is there a world you long to see?	Will you stand up and take your chance?
Then join in the fight	The blood of the martyrs
that will give you the right to be free!	will water the meadows of France!

音読指導の導入としては、寺島(2000: 48-49)を抜き刷りして教材のリストに加えた。この頁は「言語リズムの基本構造」という節で、藤井(1986)が引用されて日本語と英語の音韻構造の違いがわかりやすい例とともに簡潔に説明されている。寺島先生ご自身もリズムよみのワークショップをされるときは参加者にこの頁を輪読させてから以下の2つの英文でリズムよみを体験させておられる。強勢の部分がほぼ同じ時間的間隔になるように読ませて「リズムの等時性」を体感させるのである。私もそれにならって大学の授業開きではずっとそうしてきたし、今回の面接授業でも同様にするつもりであった。

□ □ □ . □ . □ . □
Cats catch rats. Our cat will catch the rat.

この導入のときに、英語の発音ではリズムこそが「幹」であって大切であるが、単音の発音はそれほどでもない「枝葉」であることを説明するために何か身近な例はないだろうかと思案していたときに、私はかつてまとめた山田(2010)の中で引用した自分自身の例を紹介することを思いついた。以下の文は当日の語りを前もって文字化したものである。

よく英語は r と l の発音の違いができないとダメだとか言う人がいますが、例えば、**We eat lice every day.** と言っても、それを「日本人は毎日シラミを食べてる」と思う人はいないですよ。なぜなら、それは聞き手がその単語だけ聞き取っているわけではなく文全体（あるいはその前後関係）を聞いて意味を理解しているからです。単語の子音の発音を少し間違えてもコミュニケーションに支障がおきないことは日本語でも同じです。私もずいぶん長いこと日本語のネイティブ・スピーカーをやっていますが、ワープロを使ったときに初めて「必要」「損失」という漢字を正しく発音していないことに気づきました。「しつよう」「そんしゅつ」とキーを打っていてその漢字が出

てこなかったのです。つまり、「ひ」を「し」、「しつ」を「しゅつ」と言い間違えていたのです。それでも何十年もずっと日常生活や仕事をやってこれたということは子音の間違いはそれほど気にしなくてもいいということです。英語も同じなんですよ。

なお、本節の最後に「仮名ふり」についても若干の補足説明をしておきたい。先に「「仮名よみ」であっても強弱のリズムでよむことで英語らしい発音に近づけることができる」と述べたが、これは強弱のリズムでよむことで音の連結や脱落が自然に起こるからである。以下にその例を示す。

.
 Then join in the fight that will give you the right to be free!
 セン ジョイン イン ザ ファイト(ト)ザット (ウイ)ル キブ^ニ ユー ザ ライト(ト)トウヒ^ニ フリー

この例では2箇所「連結」と3箇所「脱落」が見られるが、寺島(ibid. : 29)にしたがってこの5箇所の音の変化を少し詳しく見てみると次のように分類できる。

A. 省略	{	弱化—弱形 ↓ 脱落 —子音+子音	that will ザット(ウイ)ル	fight that ファイト(ト)ザット	right to ライト(ト)トウ
B. 結合	{	同化—子音+半母音 ↓ 連結 —子音+母音	give you キブ ^ニ ユー ^ニ	join in ジョイン ^ニ イン ^ニ	

弱化の例としてあげた **that will** について補足すると、これは **I have** → **I've**, **He had** → **He'd** などと同じ「省略」の例で **that'll** となるが、破裂音 (t) が 調音点 (歯茎) が同じ位置を持つ側音 (l) に弱まるので「弱化」と呼ばれる。ただ寺島氏はこの「弱化」も特定の音の「脱落」と考えた方が初学者にはわかりやすいのではないかと考えて **that will** 「ザット(ウイ)ル」→「ザトル」と表記する。また前音が変化する「同化」も同様の理由で「連結」に繰り入れ「教育英音法」の用語としては「連結」と「脱落」を採用している。

いずれにしても「リズムよみ」しさえすれば、カタカナ表記であっても自然と「連結」と「脱落」が生じて「英語らしい発音」が再現できるのである。しかもカタカナは発音記号と違って学習者の負担にはなることはない。

ここまでで読解と音声の教材作成についての説明をおわり、次節では別の問題について論じる。

4. 私が用紙の大きさにこだわった理由

このようにして読解と音声のプリントが完成した。表紙には科目名の下にドラクロアの名画「民衆を導く自由の女神」とその解説をつけ (資料⑤)、最初の頁には学習目標と教材リストを掲載した (資料⑥ 1頁)。当日手渡すことになる完成した教材は 60 頁になったが、全頁を PDF 化して通し番号を赤字で付けた。

学習目標については以下のように設定した。「幹」を学んで「枝葉」につなぐ、言い換えると「幹」を教えて「枝葉」を発見させる、というコンセプトの授業にするつもりだったので文法と音法でそれぞれひとつずつの学習項目だけを示した。

文法 語順（センマルセン、後置修飾）を習得する
音法 強弱のリズムを体得する

次に私が直面した問題はどのような大きさでこの教材を印刷したらよいかという問題だった。大学の授業では用紙設定のとおり A-4 サイズで印刷して使っているのだが、この面接授業は高齢の方も申し込まれることがあると聞いていたので B-4 に拡大印刷することを考えた。とくに読解プリントの「語義」とリズムよみプリントの「仮名ふり」はかなり小さいフォントが使っていて見にくいし、また読解プリントの「和訳記入欄」もこのままでは狭すぎて記入するさいに不便さを感じない人があるのではないかと思ったからだった。これについては教室の下見で岐阜学習センターを訪れたおりに所員の方に A-4 印刷のものと B-4 印刷のものを実際にみていただき後者の方に決定した。

私が文字の大きさについて関心があるのは、それで失敗した苦い経験があるからだ。自治会の役員で回覧板を作ったときに「こんな小さい字では年配の方が読めないですよ」と言われて作り直したことがある。またある高校で教えているときに、視力が弱い生徒が私の作成したリズムよみプリントを拡大コピーしてノートに貼っているのに気づいたこともあった（山田 2005 : 153）。

そんなわけで私はプリントの大きさにこだわっていたのであるが、帰宅してから下見のときに手渡された受講者名簿を見ていて 91 歳の方もおられることがわかった。B-4 サイズでも読みづらいのではないかと、という心配が出てきて私の 86 歳の母に見せたところ「見えなくはないが、大きい方が読みやすい」ということだった。そこで私は当日に要望があれば A-3 サイズのものを作ってもらおうとも考えていた。

5. 「おいしい料理」も台無しにする言葉

このようにして面接授業の準備は着々と整っていったのであるが、4 月下旬のある日、寺島隆吉先生から電話があった。寺島先生には 3 月に行われた研究所主催の研究集会やその後の掲示板投稿で私が放送大学に関する記事を掲載するたびにアドバイスをしてもらっていたのだが、今回はシラバス C 案を見ての助言であった。以下にそのときのやりとりを紹介する。

寺島先生 この案を見ると物語の読解には 3 コマしか割り当てられていないが、読解プリントは全部でいったい何枚ありますか。

山田 全部で 20 枚あります。ただ後半の 6 枚は「オプション」設定のつもりで意欲のある人を対象にしています。この 6 枚には記号をつけていないので、当日は記号の付いたプリントを白板に掲示しておくつもりです。また和訳の解答も別紙で全てつけてあります。

寺島先生 しかしそれでも 14 枚あるわけだから、これでは表紙にあるドラクロアの名画をみてやる気になっていた受講者の意欲もしぼんでしまいますよ。どんな好物でも目の前に山のようにどんと積まれたら食べる気がなくなるでしょ。

山田 いちおう最初に少なめの目標枚数を示して、「自分のペースで解答例も参考に

しながらやってください」と言うつもりだったのですが。

寺島先生 例えば、少なめに「3枚やったら単位が出ます」のような言い方をしても義務感で学ぶことになりますね。いくらご馳走でも「これだけは食べろ」と言われたらどう思いますか。中西さんの投稿(4/25)でも生徒は成績に関係なくても英文読むのが楽しいからやってるでしょ。美味しいと思ったら放っておいても勝手に食べますよ。その人の胃袋の大きさとその日の体調に合わせた量をね。それと、「学び方」を学ぶ、という観点から考えても何枚やるかは関係ないんですよ。

山田先生 寺島先生が『魔法の英語』を使って放送大学の授業をされたときは受講者にはどんなふうに指示されていたのですか。

寺島先生 僕は「進めるところまで進んでください」と言いました。ところがやってると面白くなって先に進む人が何人も出てきました。近くに宿をとって受講している人なんかは夜やることないんで勝手にどんどんやってるんですよ。

山田 そうなんですか。私の受講者名簿にも奈良とか浜松という人がいました。

寺島先生 彼らは学びたいからそこに来てるんですよ。だからテキストを解答付きで渡してるのにそれを見ない。見てやると力がつかないと思ってるからね。

山田 そこは大学生と違うところですね。

寺島先生 中には受講者の話を聞いて「そんなテキストなら私もやりたい」という人が現れてテキストの注文がきたこともありましたよ。

寺島先生は岐阜大学におられるときに何年にもわたって面接授業を担当されている。三つの「基礎教材」(註②)を用いた面接授業の映像記録は見たことがあったのだが、テキスト『魔法の英語』(寺島・寺島美 2001)を使った面接授業についてはほとんど知らなかったのだから、今回初めてそのときの様子を詳しくうかがうことになった。それにしても寺島先生の話はいつも論理明快である。しかも喩えがめっぽうおもしろくて、わかりやすい。

ただ今回の私はとても「おもしろい」と笑って聞く余裕はなかった。それどころか深刻な気持ちでこの助言を受け止めていた。なぜなら、この助言がなければ私は危うく自らを窮地に追いこむところだったからである。実は私はこれより前に研究所の掲示板に「今回の面接授業は知識ではなく「学び方」を教えたい、そして教室を出た後にも「もっと学びたい」という意欲がでる授業にしたい」と今回の授業にかける意気込みを投稿していた。

教材を完成させてほっとした気持ちがそんなことを書かせたのだと思うが、寺島先生はこの投稿と、前もってお渡ししていた61枚のカラー刷り教材もご覧になっていて少し心配になって電話をされたのであった。

私はこれまで学習意欲を失わされた高校生や大学生を教えることが多かったのだから、どうしても「〇〇をやると何点」「ここまで必修、ここからは自由」という「外発的動機づけ」の発想から自由になれていなかったのだ。そのことに気づかされた助言であった。放送大学に集うような学習意欲のある学生を教えるときには彼ら彼女らの中にある「やる気」を信じて授業づくりをすればよかったのである。

さて、五月の連休明けに最終的な受講者名簿が届いた。19歳から91歳までの37名。私はメールで机の配置を6人ずつのグループ(1つは7名)にしてほしいと事務局の方に

お願いした。この配置は当初から考えていたのだが、受講者が定員の 60 名近くなるとそういう配置は少し難しいかもしれないと聞いていたので 4 月の下見の段階では決定できずにいたのである。これでリズムよみ・グループテストがやりやすくなる。私は安堵した。そして 5 月 1 日を迎えることになる。

6. 授業の記録 — 「何を」「どう」教えたのか

6. 1 「この本、注文したんですが…」

6. 1. 1 やはり、放送大学の学生はちがう！

当日の朝はひどい雨だった。私は重い鞆を濡らさぬように車から教室に向かった。教材は前もってデーターでお渡しし印刷してもらっているのでほとんど身ひとつで行けばよかったのだが、前の机に並べておきたいと思うものがあり、それが重い荷物となっていたのだ。岩波文庫 4 冊、少年少女世界の名作・フランス編 9 (小学館)、英語版ペーパーバック、教材の元になった英語テキスト、映画パンフレット、映画 DVD、コンサート DVD、サウンドトラック CD2 枚組といった「レ・ミゼラブル」に関する一連の資料である。

これらの資料は単に教室の雰囲気づくりのためにと考えて持って行ったのだが、それ以上の役割を果たした。というのは、その二日間、休み時間などに手にとって見る人が何人もあり、またときにはそれがきっかけで私との会話が弾むこともあったからだ。

受講生は開始時間の 30 分以上前から続々と入室してきた。私はパソコンと書画カメラの切り替えをチェックしたり白板に第 1 日目の予定(C 案)を書いたりしていたが、いちばん前の席にいたやや年配の女性が私に話しかけてきた。「参考書欄に書いてあった『英語にとって音声とは何か』を本屋さんで注文したのですが手に入りませんでした」。私が「寺島先生の手元にはないか聞いてみまじょうか」と答えると「もう別の本を買ったのでいいです」という返答だった。この人は音声について関心があるのだなと思ったのだが、ふと彼女の手元に目をやると拙著『英語教育が甦るとき』があるではないか。これも参考書としてあげておいた一冊だったが、私は初っ端から「やはり放送大学の学生は違う！」と思わざるをえなかった。

6. 1. 2 「英語学習史」を語った自己紹介

開始時間 9:45。私は白板に自分の名前を大きく書いて「ここから一番近い大学で教えています。窓から見えます」と言ってから「私の英語史」を読み上げた。これは山田(2014)に収録してあるもので、大学から始まる「英語学習史」と教師になってからの「英語授業実践史」で構成されている。その冒頭部を 5 分ほど読んで自己紹介としたのである。

そこには大学に入るまで 18 年間に一度も英会話をしたことがなかった私が最初の英会話の授業で聞き取りができずに顔色を失ったことや、その後に寮であった 2 つのエピソードが紹介してあった。そのうちの 1 つの話ではクスクスという笑い声が聞こえた。湯船に入っているときに留学生が言った「あひる」という言葉がわからずに、後でよくよく考えて「いい湯ですね I feel good.」だとわかったという話である。

この後に、実は最後までこれを言うか言うまいか迷っていたのだが、「こんなふうに 18 年間英会話したことがなくても英検 1 級が取れるんですよ」と言った。私の予想どおり「えー、すごい」と言う声が聞こえた。私が迷っていたのは「英検 1 級」という印籠で自分を

権威づけしたくなかったからである。

実際のところ、そんなものは教育現場ではほとんど役に立たない。私の教えてきた学校ではつまらない授業であれば生徒は騒ぐし理解できなければ寝てしまう。彼らには、優等生が持っている「つまらなくても我慢して黙って聞いている能力」はなかった。幸いにしてその能力はなかった、と言った方がいいのかもしれない。というのは、わからないことはわからない、つまらないことはつまらない、おかしいことはおかしい、と言う人間の方がいる意味で「まとも」だとも言えるからである。しかし、いずれにしても、教師に必要なのは「英語力」ではなくてむしろ「授業力」「教育力」の方だった、ということだ。

それではなぜ今回あえてその印籠を出したのかというと、世の中は「小学校から英語の音声に慣れさせる」「英会話ができるようにするために英会話を勉強する」という考え方が当たり前のようになっているからだ。私は自分の体験を語ることがそれへの生きた「反証」になると考えた。受験勉強で培った「読む力」「書く力」があれば「話す力」「聞く力」はその後に集中的にトレーニングすればそこそこには身につけられるということを受講生に伝えたかったのである。(註③) この自己紹介は前日に思いついた案だったが、学生の感想の中に「先生の自己紹介もよかったです」とあるのを見て、思いきってやってよかったと思った。

6. 1. 3 背景知識たっぷり、文法知識ミニマム

第1日目の1コマ目はほぼ予定通りに進んだ。「物語冒頭部の輪読」→「映画冒頭部15分」→「読解への導入：文法の幹」「練習プリント」という流れである。これらは内容的にみても重なりあうところがあり、また足りない部分は補い合うようになっている。次におこなう物語読解のための Content Schema を提供するものである。

物語冒頭部	出獄したバルジャンが宿屋に拒否される。そして司教に出会う。
映画冒頭部	1815年ツェルン。司教との出会い、盗みへの赦し、再出発の決意。
練習プリント	庭師バルジャン、冬で仕事がなく姉の子どもを飢えさせぬためにパンを盗んで投獄される。

「読解への導入：文法の幹」のプリントについては第3節ですでに紹介したが、語順の変換ルールを示した部分を以下に紹介しておく。

英語	日本語
(1) <u>Cats</u> (<u>catch</u>) <u>rats</u> . 主語	ネコは <u>ネズミを</u> (<u>つかまえる</u>)
(2) <u>Rats</u> [<u>cats</u> (<u>catch</u>)] ← 後置修飾	[<u>ネコが捕まえる</u>] <u>ネズミ</u> 前置修飾 →

「練習プリント」には2つの和訳問題があり、最初のが上記(1)「センマルセン→センセンマル」、もうひとつが(2)「後置修飾→前置修飾」の練習をするものであった。問題の一部を例として下に載せる。見てのとおりとても簡単な和訳である。

設問 5

1. I (was) a gardener.
私 だった 庭師 _____
2. That winter (was) very cold.
その冬 だった とても寒い _____

設問 6

1. the time [my story begins]
とき 私の話が始まる _____
2. my first taste [of freedom]
私の最初の印象 自由に関する _____

どちらも少し自分で取り組む時間をとってから順に指名して答えを聞いていった。指名された学生はほとんどがすぐに正解を答えていったが、二日目に個別で一人一人のプリントを見たときに設問 6 の練習問題があまりやれていない人がいることに気づいた。やさしい語順の並べ換えなのでこのときにグループで答え合わせをしてもらってもよかったのではないか、あるいは正解をつけておくなどの配慮が必要だったのではないかと、思った。

6. 2 「でも、その日本語、なんか変です」

6. 2. 1 つぎつぎと上がる質問の手

2 コマ目からは物語の読解プリントに取りかかった。最初は一斉方式で指名して和訳を言ってもらっていたが、最初の段落の 7 個の英文だけで止めることにした。というのは、前時におこなった「練習プリント」のときとは違ってすぐに答えが言えない人があり、その人にヒントを出しながら進めているとかなり時間がかかることがわかったからだ。また書画カメラでスクリーンに映し出した英文を見ながら進めるのは目が疲れる。

そこで私は次のように宣言して個別進度学習に切り換えた。「この後は自分のペースで進めてください。進めるところまで進めばいいのです。どれだけやらないと単位がでない、ということはありませんから安心してください。大切なのは和訳のしかたが自分で納得してわかることです」。

教室が静かになって暫くしてから私は肝心なことを言い忘れていることに気づいた。「みなさん、答えが 33 頁以降についていますからわからないときは見て下さい」と言ったら「なーんだ」という反応がいくつか聞こえてきた。それでも答えの頁を開く人は誰もいない。みな黙々と読解プリントに向かっている。やはり寺島先生の言うとおりであった。

わからないところがあればどんどん尋ねてください、と私が言ったのに応えて質問の手が次々と上がった。その質問の中で印象に残ったもの 2 例を以下に記す。

ひとつは、I (could not let) the children starve という英文についてである。これには「couldn't ～できなかった」「let ～ … ～が…するようにさせる」というふうに語義が与えられていたが、これがよくわからないという質問だった。そこで私は以下のような板書を書いて「こんなふうに、「センマルセン」を適用するといいですよ。つまり、センの中に小さな文が入っているわけですね」と説明した。

てその推測は当たっていたと感じました。文法面での幹を「センマルセン」に落としこんだ上で、授業では学生からの指摘の後に「よく気づいたね。それはね…」と説明を始められました。実は今年度に入ってから私自身もそのようなやりとりを生徒とする機会が増えている。生徒が気づいて質問するというのはたいへん勇気がいることだと思いますし、気づくのもすばらしい力があるんだと感じ、英語を教えていて良かったなと思うのです。

少し長い引用となったが、後半部分では彼自身の教室の様子も紹介されていて実に興味深い。生徒がいきいきと学んでいる様子が目に見えるようだ。後で短時間だが彼の話聞く機会があった。授業では語義をたっぷりと与えてポイントになる項目のみを教えるようにしているとのことだった。以前からときどきあることだが、彼のように、寺島先生が主宰する研究会（現在は研究所）に所属しない人が一連の著作だけを頼りに実践して成果をあげている例がある。寺島メソッドがいかに現場の教師の要求と合致しているかの証左だろう。

話をもとにもどすと、この物語の読解プリントの授業はこんなふうに進んでいったのだが、私は教室がしだいに熱気で熱くなってきたような気がした。朝の雨が上がったのだろうか。時計を見ると時間はすでに12時半ちかい。まだ終了時間までには20分ほどあるが、もう1時間近く「リーディング・マラソン」をやっていることになる。これほど長い「マラソン」は大学の授業ではやったことがない。いくら学習意欲があるといってもこれではちょっときつい。また年配の方も何人かおられるし、私も少し疲労感を感じ始めていた。

そんなことを思っ受講生を見るとその表情にも心なしか疲れの色が見えるような気がしてきた。そこで私は思い切って予定変更することにした。「みなさん、疲れたでしょう。続きはまた明日ということで、残り時間は「レ・ミゼ」のコンサート版を見ましょうか」。すると受講生の顔には一様に歓迎の表情が浮かんだ。私は「これから見るところは午後からやる Look Down という歌がまた出て来ますので予習になります。映画とはひと味違ったミュージカルを楽しんでください」と言って上映を始めた。かくして1日目午前は終わった。

6. 3 「えー、前で発表するんですか!?!」

6. 3. 1 話せるようになって失なうもの

午後の授業は13:35から始まった。今度の2コマは音声を学ぶ時間である。当初のA案のままならまた読解作業が続くところであった。このときシラバスを変えて本当によかったと思った。一日中ずっと「頭」を使う課題だったら学習者だけでなく教える側もへとへとなっていたことだろう。わたしは今回初めて経験することになった「1日4コマの集中授業」においても「静」と「動」をうまく組み合わせることの必要性を痛感した。

午後の授業記録を始める前に、昼休みにあった出来事を紹介する。ひとりの年配の男性受講生の方が私に話しかけてきた。「私は地元にあるインターナショナル・スクールの世話をしている。そこに通う子どもたちがやがて上手に英語を話すようになるのだが、そのことをどう思いますか」という質問であった。私は「英語を使っていればそうなると思う。ただその英語はおもに生活言語ではないか、長い目で見ればむしろその時期には国語の力

をしっかりと身につけたほうがいいのではないかと答えた。(註④)

このやりとりで私は翌日の読解授業に先立って英語力と日本語力の関係をお話しておくとよいと思うようになった。この話については後節で詳しく述べるが、この質問者の授業レポートにはその話に触れた箇所があるのでその部分のみを紹介しておく。「英語力が日本語力に比例するとの事であったが、和訳してみても表現力の必要なことが深く心に焼き付いた」。

6. 3. 2 E.T. にはあった「恥をかく勇氣」

午後からの2コマは英語の音声を学ぶ授業である。第3節でも述べたように寺島(ibid.: 48-49)の抜き刷り資料「英語リズムの基本構造」を輪読していった。その後、資料の右頁にある図については、その一部を以下のように板書して若干の補足をした。○○-timed 「○○によって発音の時間が設定される」というところを説明したかったからである。

日本語 ね こ は ね ず み を と る。
う ち の ね こ は ね ず み を と る だ ろ う よ。

→ 時間は長くなる。

音節 syllable の数で時間が決まる。 **音節のリズム**

英語

Cats catch rats.
キャツ キャチ ラツ

○ ○ ○
Our cat will catch the rat.
アウ キャット ウィル キャチ ザ ラット

↓ 発音される時間は同じ！

強音節 stress の数で時間が決まる。 **強勢のリズム**

この説明の後に第4節で紹介した「子音の発音」の話をした。「We eat lice every day.」を板書したときには「シラミだ」との声が聞こえた。しかし私は、どうしてこんな単語の認知度が高いのか、と不思議に思うことはなかった。多くの人がrとlの発音の区別が大切であると主張する本の中でこの単語のペアを目にしているに違いないからだ。実を言うと私もそうだった。

いずれにしてもあまり目にすることはない単語だが、奇しくも、この単語に今回の教材で出会うことになった。宿屋の主人テナルディエの歌の中に宿賃の追加の条件を述べる行があり、そこに「♪ Charge them for the lice, Extra for the mice」という英文があるのだ。「美しい」脚韻をliceとmiceという「美しくない」単語で踏んでいるところがいかにも子悪党にふさわしい台詞であるが、それを活かして和訳すると「♪シラミなしは追加料金、ネズミなしも追加料金」といった感じになるだろうか。

話をもとにもどすと、こうして「英語リズムの基本構造」の説明と「子音の話」をしたあとで2つの英文をリズムよみする練習に入った、一斉練習の後にグループ毎に声と打点を揃えてよむ練習をするように指示した。このとき6つのグループを回って練習を見てみ

るとリズム打ちをやっていない人が何人もいることに気づいた。私はこう言って受講者を励ました。「リズム打ちをすることは頭だけでなく体にもリズムを刻み込むことになります。体が覚えると忘れませんよ。声と合わせて打つのは最初は少し難しいかもしれませんが、やれば必ずできます。がんばってください」。この 2 つの英文についてはグループ毎にその場で立ち上がってもらって発表してもらった。

次に Look Down のリズムよみに入った。使ったのはその前半部分である。後半部分のジャベールとバルジャンの対話はややリズムが不規則なところあったので除いた。

一斉のリズムよみ練習のあとで音の連結や脱落に注目させた。連結については下線の下にカタカナを書き込ませて音の変化を確認してもらった。

○ □ ○ □	○ □ ○ □ ○ □
The sun is strong	It's hot as hell below
ザ サン_イズ ストロング	イツ ホットアズ ヘル ビロウ
ニ	タ

このときひとりの女性受講生から質問が出された。強くよむところには□と○があるが、どう違うのか、という疑問だった。私は読解のときと同じように「なかなかいいところに気づきましたね。それは…」と言って白板も使って説明をした。いわく、内容語は□、機能語は○で区別している、通常は内容語は意思伝達の上で重要な役割を果たすので強勢となり大きい□となるが、機能語は補助的な役割なので弱勢で小さい○になる。ただ、リズムの調子や文相互の関係で、逆に内容語が弱勢になって小さい□、機能語が強勢となって大きい○となることもある、と。

I

□ □ □ □

Look down, look down
ルック(ク) ダウン ルック(ク) ダウン

○ □ ○ ○ ○ □

Don't look them in the eye
ドン(ト) ルック(ク) ゼム イン ジ アイ

□ □ □ □

Look down, look down,
ルック(ク) ダウン ルック(ク) ダウン

○ □ ○ ○ ○ □

You're here until you die
ユア ヒア アンティル ユ ダイ

II

○ □ ○ □

The sun is strong
ザ サン_イズ ストロング

○ □ ○ □ ○ □

It's hot as hell below
イツホットアズ ヘル ビロウ

□ □ □ □

Look down, look down,
ルック(ク) ダウン ルック(ク) ダウン

○ □ ○ □ ○ □

There's twenty years to go
ゼアズ トゥエンティ イヤー(ズ)トゥゴウ

この教材も一斉練習の後にグループで音と打点をそろえる練習をしてもらった。しばらくしてから「今度は前で発表してもらいます」と宣言すると「えー！」という驚きとも悲鳴ともつかぬ声がいくつも上がった。

そこで私は「恥をかく勇氣」(寺島 2007)について少し語るようになった。「英会話力をつけるには人前に出ても怖じけずに話せる人間力が必要です。少々間違ってもどンドン話そうという意気込みが大切なのです。

たくさん英語を知っていても間違いを恐れて話せない人がいる一方で、片言英語とジェスチャーだけで自分の言いたいことを相手にわからせてしまう人がいるでしょう。こういう人は他者に立ち向かう力、いわば「恥をかく勇氣」を持っているのです。間違ってもどンドン話す人ほどその言葉の上達は早いんですよ。これは「量質転換」といいます」。

「それに、そうやって相手と言葉のやりとりをしていると相手が聞き返してくれることがあります。それを聞いて自分の誤りに気づくこともあるんですよ。みなさん、E.T.という映画を観たことはありませんか。

その中で E.T.と少年エリオットの妹ガーティの間に興味深い会話のやりとりがあります。E.T.が窓の外を指さして「E.T. HOME PHONE」と言ったあとにガーティが「E.T. PHONE HOME」と言い直すのです。つまり最初、E.T.は「E.T. 家 電話」と名詞を並べただけだったのにそれを聞いたガーティは「E.T. 電話する 家に」

という英語の語順に並べ換えて英文にしたのです。無意識に PHONE の品詞も変えてね。そうやって E.T.は英文の構造「センマルセン」を学んだのです。彼は「恥をかく勇氣」を持っていたから言葉を覚えて自分の星に帰っていきことができたということです。

この話は受講生の心と頭に届いたようで全てのグループが前で発表することになった。そしてどのグループの発表のあとにも自然と拍手が沸き起こった。

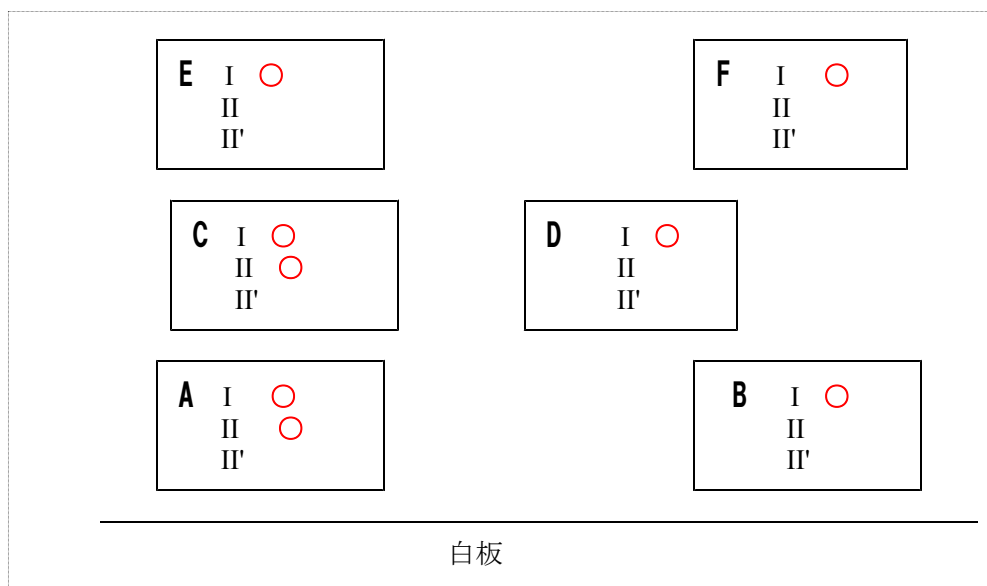
この発表のあとまだ少し時間が残っていたので、次の時間にやるつもりだった「民衆の歌」の予習をした。コンサート版 DVD の該当箇所を見てもらったのだ。このとき私はちょっとしたへまをやった。まちがえて違うところを映してしまって、しばらくしてからそのことに気がついたのだ。「ごめんなさい、まちがえました」と言ったら「アハハ」という女性の声が出た。リズムよみ発表の楽しかった余韻^{あざけ}さめやらぬ雰囲気^{あざけ}のせいだろうか、思わず出た笑い声だったように感じたが、それは嘲^{あざけ}るようなトーンではなく、むしろ私はその「アハハ」で救われたような気がした。

6. 4 「ここ、もう一回、歌ってください」

6. 4. 1 歌ってみたくなる「民衆の歌」

実を言うと、最初の予定では「3 コマ目に Look Down 全部のリズムよみ練習をして、4 コマ目はリズムよみ発表、そして対話式群読」だったのだが、3 コマ目の途中でこの流れだと群読まで進むのはちょっと無理ではないかと感じた始めていた。対話式発表は一手間余分にかかるからである。それで4 コマ目は「民衆の歌」に入ってしまうと思ったのである。全て終わってからふりかえてみると、この変更はその後の授業進行に功を奏することになった。「民衆の歌」のリズムよみは意外と手強かったからである。

前時の Look Down と同様に全体でリズムよみ練習をおこなった後にグループ練習に入ってもらった。「I、II、II'の 3 つのパートに分けてグループ発表してもらいます」と宣言して白板に以下のような図を描いた。合格したにパートに○（赤丸）をつけていくようにしたのだ。パート I から順に発表してもらったが、その発表は希望順でおこなった。



音楽の授業ではないので歌えなくてもかまわない、リズムよみがしっかりできればいい、と言っていたにもかかわらず、やはり歌ってみたいと思う受講生が何人もいた。グループ

練習のさなかに「先生、CD をかけてもらえませんか。この i-pod に入れますから」という要望が出された。私は「いいですよ。でもスマホをお持ちなら検索ですぐに音声がかかりますよ」と答えると数名の人がすぐにスマホを出して練習を始めた。

先ほど「この歌はなかなか手強かった」と述べたが、みなが一様に苦労していた箇所は弱勢が続くところや、行頭が弱勢で前行からうまく入れない部分であった。〔その部分を以下に赤字で示した。〕

○ ○ ○ □ ○ ○ ○ □ ○ ○ □ ○ □
there is a life about to start / when tomorrow comes!

○ □ ○ ○ □ ○ ○ □ □ ○ ○ □ ○ ○ □
Then join in the fight that will give you the right to be free!

○ ○ □ ○ ○ ○ □ ○ ○ □ □ ○ □ ○ □
Some will fall and some will live. / Will you stand up and take your chance?

また II と II'の旋律を歌って教えてほしいという要望もよく出された。私は全グループがひとつのパートの発表が終わる毎に、次のパートの練習のためにまた全グループを回って援助をおこない、ひとまわりし終えたタイミングで「それでは次のパートの発表をやりましょう」と言って授業を進行させていった。

6. 4. 2 「映画の続きがみたい」に答えて

この発表もすべて前に立って行われたが、前に出るとやはり緊張するせいか、上手くできないグループも出てきた。ただそのときも「はい、そこだけやり直し」と言って私のリズムよみの後に付いてもう一度言い直してもらった。そんな場合でも発表が終わると必ず拍手が沸き起こって、教室はお互いの努力を称え合う雰囲気でも満たされていた。

私はそのような心地よい興奮を味わいながら 1 日目の授業を終えた。教室を去る受講生と「ありがとうございました」「お疲れさま、また明日」とあいさつをかわしていると、2 人の女性が私に近づいてきて「先生、映画の続きが見たいので明日の授業が始まる前の時間に流しておいてもらえませんか」と頼んできた。私は「いいですよ。9 時少し過ぎには来るつもりですから」と返答した。

私は帰宅後に考えた。「見せるのはいいが、教室が開く 9 時から始めて始業時間 9 時 45 分まで映しても最後の 76 分は見せられない。その最後の「1832 年パリ」の場面を見なくては「民衆の歌」は真に理解できないではないか。いっそのこと授業時間内に残り全てを見せてはどうか」。そう考えて作成した 2 日目のスケジュールが以下のものである。

- 1 時間目 **座席表作成** 文法説明 10 分 物語の読解プリント 75 分
- 2 時間目 物語の読解プリント 40 分 映画鑑賞「1823 年 モントルイユ」 43 分
- 3 時間目 映画鑑賞「1832 年 パリ」 76 分
- 4 時間目 ♪民衆の歌（通しよみ＝I II I II' I） グループ練習、発表 50 分
授業感想文（記名）、授業評価アンケート（無記名） 30 分

このときもうひとつ思いついたことがあった。それは冒頭の節でも述べたことだが、座席表を作ることだった。顔と名前がまったく一致しない。後悔しきりであったが、まだ遅

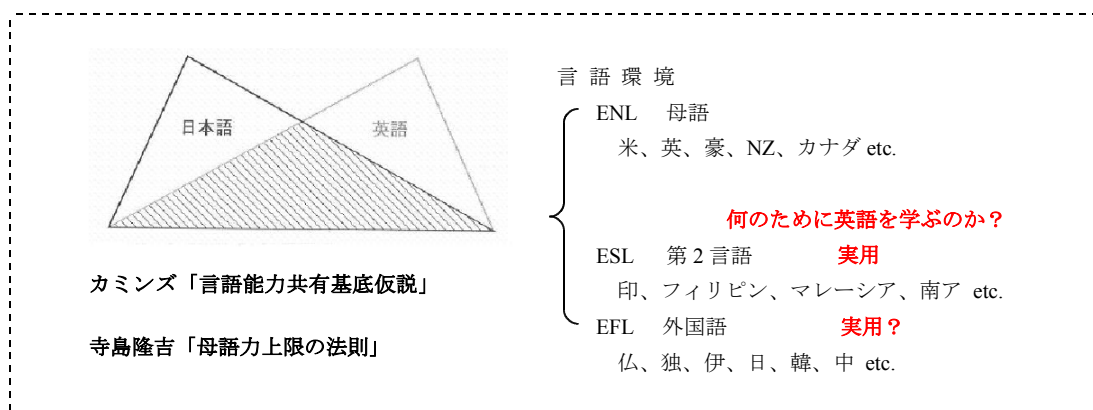
くはない。1時間目の最初に座席表を回覧して記名してもらうことにした。

6. 5 「母語力上限の法則、納得しました」

6. 5. 1 日本語力と英語力の関係を語る

2日目が始まった。私が9時少し過ぎに教室にはいるとすでに十名以上の人がいた。わたしは「映画の残りは授業内で全てみることにしました。それで今はコンサート版の方を見ますが、字幕は英語にしますか、それとも日本語で見ますか」と言った。お互いがまだよく知り合っていないせいか遠慮し合って決まらないので日本語で見せることにした。

1コマ目の読解プリントの時間は私の説明から始めた。前日の昼休みに聞いたインターナショナル・スクールの話に触発されて少し語りたいたいことができたからだった。その説明のときの板書を以下に示す。



まず左側の図をから書いて私は話していった。「昨日、インターナショナル・スクールの世話をしておられる男性の方から「そこに通う子どもが英語が話せるようになることをどう考えますか」という質問がありました。そこで私は「確かに英語は話せるようになると思いますが、少し長い目で見たらその時期は国語の勉強をしっかりやったほうが英語力はつくと思います」と答えました。というのは、英語力と日本語力は別々のもののように見えますが、実は根っこの部分では共通しています。ですから、英語力は日本語の力がある人ほど伸びる可能性があるわけです。日本語で理解できないことはそれが英語で書かれていたら理解できるわけないでしょ。こんなふうに考えるともっとわかりやすいかもしれません。本を読んでいても、例えば自分が知らない分野や関心のない内容だったら日本語で書かれていてもあまり理解できないということはありませんか。それが英語だったらなおさらよくわかりませんよね」。

この話に続けて昨今、話題になっている小学校英語についても私見を述べた。「2020年にオリンピックがあって外国人が来るので、そのときに道案内ぐらいはできないと困るとかいうことで小学校から英語が始まりますが、日本に来る人はガイドブック見て簡単な日本語を勉強してきますよ。私たちが外国旅行をするときにはその国の言葉を少しかじると同じです。いま世界には日本語や日本文化に関心持ってる人がたくさんいますよ。私の当時の勤務校にノウルさんという米国人 ALT が来ましたが、彼は来たときにはもうけっこう日本語が話せるんで“どうやって勉強したんですか”と聞いたら“ナルトとワンピース”という返事でした。つい最近も女子フィギュアで優勝したロシア選手がいたでしょ。

彼女のエキシビションの音楽はセーラー・ムーンで最後は日本語で“月にかわっておしおきよ”って言ってましたね」。

このアニメの話には全く受講生が何人もいたので、つい調子に乗っていらぬことまで言ってしまうと失笑をかった。「私はセーラー・ムーンは詳しいんです。娘が小さい頃には流ってましたから。当時、家にはセーラー・ムーン・ロッドが3本ありましたよ」。

わたしは右側の図も書き加えて話を続けた。「道案内のような実用が不要で、ごく一部の人を除いては日常生活や仕事でも英語を使うことがない EFL の環境の日本において、ではどうして英語を学ぶのでしょうか。私はひとつは日本語の発見だと思います。昨日、「センマルセン」でやりましたが、和訳してみても初めて日本語の動詞が文の最後にくることに気づくんじゃないでしょうか」。

まだまだ話したことがあったのだが、いまその全てを正確に思い出して書き出すことができない。その代わりに受講者の感想文をひとつ紹介しておく。「何で英語を学ぶかという意図、母語の発見や文化の違いを知ること（共存）ということも納得します。そして母語力上限の法則も納得出来ました。文化を創り上げる言葉を大切にすること、そして色々な言葉を話す人々と主に地球上で暮らすこと、言葉を楽しんで学べました」。

6. 5. 2 「センマルセン」と言うならば…

このような話をしたあとで物語の読解プリントの続きに取りかかってもらった。ただ今度は机間巡視はやめて1人ずつ私の席の横に来てもらってその人のプリントを見ながら質問を聞くことにした。

この指導方法は偶然に大学で試してみても好評だったものである。個別進度でプリントに取り組むと当然に進度差ができるので、回収して添削するとか、あるいはこの方式を取るのである。もちろんこれはクラス規模がそれほど大きくない場合に可能な方法なのだが、自分がわからないところをピンポイントで聞けるところがいいのであろう。

今回の面接授業の感想の中にも「個人的なアドバイスがあったことはよかった」「全員の生徒1人1人に教えていただき感謝します」といった声があった。学習者の立場から考えると、自分の聞きたいことを教えてもらえるということだけでなく、「ひとりひとりが個別に」に教えてもらえるという点が授業への満足度を高めるのだろう。

この個別指導で何人もの学生から「よくわからない」と指摘された共通のところがある。それは **Maybe that's why I did what I did.** という英文であった。そう思わせた原因はその英文に付けられた語義であった。この語義の与え方が間違っていたのである。

¹⁸ Maybe that ('s) why I (did) what I (did) .

Maybe おそらくは that's why そんな理由で did した what I did 私がしたこと

英文を読むときには「センマルセン」を適用して「センセンマル」に語順変換しなさいと教えたにもかかわらず **that's why** をセットフレーズと考えた語義を与えていたのである。これだと「おそらくは、そんな理由で、私は私のしたことをした」と和訳させることを想定していて、確かに「**I (did) what I did** →私は 私のしたことを (した)」の部分では

その語順変換が行われているのだが、肝心の文全体の「センマルセン」が見えていない。したがって次のように改訂される。

¹⁸ Maybe that (s) why ^{18'} I (did) what I (did) .

Maybe おそらくは that's why それ・ある・理由 did した what I did 私がしたこと

18 おそらくはそれが理由である 18' 私が私のしたことをした

プリントの改訂については次のような指摘もアンケートの中にあつた。「センマルセン」というならば英文に「セン」も付けておいてほしい、という要望である。これまでは「セン」まで付けると記号が多すぎて目ざわりではないかと考えてそうしていたのだが、最初の一二枚はそのようにしておくのもよいのではないかと思うようになった。そこで現在の記号づけと「セン」も追加したものを並べてみた。

現在の記号づけ

「セン」も加えた記号づけ

<p>¹Years ago I (stole) a loaf of bread ^{1'}[to (feed) my hungry family. ²I (was sent) to prison ^{2'}and (sentenced) to hard labor. ³I (traded) my name [for a number]. ⁴I (was) no longer Jean Valjean. ⁵For nineteen years, I (was known) as number 24,601. ⁶That (was) a dark, lonely time for me.</p>	<p>¹Years ago I (stole) a loaf of bread ^{1'}[to (feed) my hungry family. ²I (was sent) to prison ^{2'}and (sentenced) to hard labor. ³I (traded) my name [for a number]. ⁴I (was) no longer Jean Valjean. ⁵For nineteen years, I (was known) as number 24,601. ⁶That (was) a dark, lonely time for me.</p>
---	---

現在の記号づけにおいても、前置詞句も[]を付けずに名詞句と同様に「セン」として扱っていたのだが、「セン」を書き入れるとそのことがいっそうくっきり浮かび上がってくる。最初は「センマルセン」の幹をしっかりと学ばせようとするならやはり右側の記号づけでスタートしたほうがいだろう。

6. 5. 3 日本語読解力に影響される英語力

¹²I (stopped) [at the best inn [in the town [of Digne. ¹³I (entered) and the innkeeper (called), ¹⁴"What (can I do) for you, monsieur?" ¹⁵"I (want) a meal and a bed," ^{15'}I (replied). ^{15''}"I (have) money." ¹⁶The few francs [I (had earned) in prison] ^{16'}(were) more than enough ^{16''}[to (pay) for food and lodging. ¹⁷"In that case, you (re) welcome," ^{17'}(said) the innkeeper.

個別指導をしていたときの質問からあとふたつ書き残しておきたいことがあるので以下に記す。ひとつめは、英語力というよりは日本語力が十分でないために和訳ができないのではないかと思われる例があつた。質問者は最後の文 17'を「宿屋の主人に言った」と和訳してどうも意味がよくわからない、ということだった。

確かにここでは the innkeeper は動詞 said の後にあるので主語ではないと考えてそう訳したのであろうが、文脈から考えた

ら会話が「バルジャン→宿屋→バルジャン→宿屋」次のように進んでいることがわかるはずである。

ただ、語り(地の文)と台詞が混在しているのでわけがわからなくなったと考えられるのだが、こんなところにも日本語での読解力の影響が出てくるという例である。

バルジャン (語り) →宿屋(台詞)→バルジャン (台詞) →バルジャン (語り) →宿屋 (台詞)

もうひとつの質問は、英文の読解に関わるものではない。この受講生は個別質問のときに「和訳についてではなくて聞きたいことがあるが、いいですか」と尋ねるので私が「もちろんいいですよ」の答えると「石川遼君の宣伝している英会話教材をどう思いますか」という質問だった。この人は前日にインターナショナル・スクールの子どもの英語について尋ねた人である。

私は次のように答えた。「昔の英会話教材はテキストを見ながら音声を聞かなくてはならなかったが、この教材は英語の後に日本語を言ってくれるところは確かに便利である。ただ英文単位で和訳を言うのでその英文の丸覚えになる。例えば、「I am a boy.→私は少年です」のように聞こえたら「am =は」だと覚えてしまって文の仕組みはわからない。だから、ただそれを聞いているだけで英語の力が付くとは必ずしも言えないと思う」。

この質問者の話を聞いていると仕事の上で英語を使っている人だというもわかったので、ある程度の英語力があると思われた。そこで「英文の構造がわかっている人が利用するなら役立つかもしれませんが」とも付け加えた。「英語で授業」もそうなのだが、「聞き流すだけで英語ができる」とか「〇〇〇時間、聞けば身につく」といった教材は外国語習得を母語習得と同様に考えているのだろう。

全体の中で挙手して質問するのはかなり勇気がいるが、このような個別の QA だと尋ねやすい人もあるだろう。ここには書き切れないほどのたくさんの疑問や質問が出たきたが、その質問の中にはいま述べたように傾聴に値するものがいくつもあり、私自身も得るところが少なからずあった。この個別 QA は 2 コマ目の映画上映の開始時刻まで続け、やり残した 1 グループについては 4 コマ目の冒頭に時間を取っておこなった。

6. 6 「長く生きると辛いことも多いけど…」

6. 6. 1 間違っていなかった映画の完全上映

二日目の 2 コマ目の後半と、昼休み後の 3 コマ目はその時間の全てを映画鑑賞に当てた。このことについては、アンケートで「1 コマを全て映画にあてるのはいかがなものか」として評価項目「工夫」に 2 を付けた人もいたが、大半は肯定的な意見だった。私自身も急遽、予定を変更した決断は間違っていなかったと思っている。とりわけ次のような感想を読むと、その思いをいっそう強く感じる。女性と男性の声をひとつずつ紹介する。

今回は「レ・ミゼラブル」という未見のミュージカルを題材の授業ということで不安もありましたが、映画を最後まで観れて、覚えた歌のフレーズがドラマの中で何度も流れ、その度に様々なシーンが歌と結びついて、最後にグループのみなさんと歌ったときには胸がいっぱいになりました。あの、勇気ある少年、目をあけたまま亡くなっ

た彼の胸にバッジを置いた警察の人、涙が出ました。年をとったからこそ、いろいろな立場の登場人物に感情移入できるのも再認識できました。長く生きると辛いことも多いけれど悪くないですよ。

今回の講座で最も興味を持つことができたのは DVD 鑑賞である。2 日目は大半の時間を DVD 鑑賞に費やし最後まで観ることでこの物語の理解を深めることができた。あまり歴史（とくに世界史）は詳しい方ではなく知識も少なかったが、資料の中に年表があったので他の国の出来事やその時間軸と合わせて物語を楽しむことができた。割と長い作品だったのでまるまる一本見通したせいか見終わった後に少し首が痛かったが、それほど集中して映画を鑑賞することができたのだと思う。

最初のもは 50 代の女性が書いたものだが、書き手の感情が生き生きと伝わってきて心に響く文である。とりわけ「年をとったからこそ、…」からの文は放送大学でしか聞けない貴重な内容だと思った。またこの感動は最後まで観たからこそ味わえたものである。

ふたつめの作文は 19 歳の男性だが、歴史年表について言及してくれているのはとても嬉しい。というのは、この年表は山田(2014)に掲載したものの改訂版なのだが、まず最初の元案ができるまでに資料の読み込みなどでかなりの時間がかかっている。さらに今回の授業に備えて再び見やすくするために力を注いだ。西永(2017)の巻末にも実世界での出来事と小説内の出来事を対比させた詳しい年表があるが、簡潔さと視認性においてはこちらの方が優れていると密かに自負している。年表に「©yamada2017」と入れた所以である。

またこの若い受講生は「他の国の出来事」にも着目しているが、実はそこにも私のねらいがあった。というのは、当時のフランスは国内的には人権宣言(1789)が出され王政から共和制となっていたのだが、対外的には隷属的な植民地を持っていたからだ。それゆえ年表ではアルジェリアやハイチのことも言及している。いま同国で頻繁にテロが起きる要因を歴史的に遡ると、それは同国の外交軍事政策と無関係ではないと私は考えている。

6. 6. 2 映画は「会話」ではなく「背景資料」

映画の見せ方については「そんなに難しい表現はないので英語字幕でもよかったのではないか」という声が二三あった。ステージ版の方では無理かもしれないが、映画の方はそれに比べて映像情報のはるかに多いのでやれそうな気もした。そこで試しに大学の授業で英語字幕で上映してみた。ちょうどこの映画を見せている途中だったからだ。後半の 50 分ほどを 2 回に分けて英語字幕で上映したが、ジャベールが身を投げるシーンの台詞で「これはやはり難しい」と直感して、その後は日本語字幕に急遽切り替えた。

案の定、後で「ジャベールがどうして自殺したのかわからない」という質問が出た。彼の自殺の理由は、前時に見たバルジャンが捕らわれていたジャベールを逃がしてやった場面の対話と、ジャベール「投身」の台詞の意味がわからないとよく理解できないのだ。そんなことを考えるとやはり英語字幕は無理なのではないか、というのが当面の結論である。

また「ときどきフレーズの解説がほしい」というものもあったが、これについては私はやらない方がいいと考える。途中でフレーズの解説を入れると見る楽しみを削ぐことになるからである。これをやり出すと「英語を学ぶために」映画を観ているような感じになる。

「物語を味わう（楽しむ）ために」とはならない。ただ上映の途中ではなく終わってから先に紹介したテナルディエの台詞の話のような「小ネタ」を息抜きとしてするのは面白いかもしれないとは思っている。

なお、映画を教材としてどのように用いるかについては、山田(2014)で論じたことがあるが、その中で映画のシナリオ（会話）を使わない理由を3つ挙げている。ひとつは、会話は状況依存性が高く、省略もあってやさしそうで意外と難しいこと、ふたつめは、英文量が少なく文法や音法の基本構造を繰り返し学べないこと、みつめは、「自由な会話」は外国語学習においては最終到達点であることである。そのような理由から私は映画は英文読解の背景知識として使うことにしている。

6. 7 「来年もこの授業、ありますか？」

6. 7. 1 新たな意欲を生み出す「寺島メソッド」

最後の時間は先述のように最初の10分ほどは読解プリントの個別対応をしたが、そこが前夜に考えた計画と異なるところだった。その後は、♪民衆の歌（通しよみ＝I II I II I）のグループ練習（25分）、発表（20分）を行い、残りの30分は授業感想文（記名）、授業評価アンケート（無記名）に割り振った。

それまで3回のリズムよみテストでグループワークを経験してきているのでどのグループもメンバーがまとまって練習する様子が見てとれた。どのグループでも私が回ってくるとすぐに「先生、ここを教えてください」という要求が出されて、25分の練習時間はあっという間に過ぎていった。発表は希望順で行ったが、どのグループの発表のあとにも大きな拍手がおこり、私が「合格！」という喜びの声がグループ全員から上がった。

この音声課題では、リズムで声を揃えてよむ（あるいは歌う）ことだけを協同活動のタスクとし、「暗唱」することは求めなかった。覚えることを課していたならば、これほど盛り上がり教室に楽しい雰囲気生まれることはなかっただろう。

リズムよみが盛り上がるのは「できそうでできない、でもやっていると必ずできるようになる」という達成可能な困難性があるからである。だから「できた実感」が喜びとも自信ともなるのである。しかもそれを仲間と協同で達成するからその喜びはまた格別だ。

読解の方法についても同じように「できた実感」が味わえるような工夫が施されている。語義がほとんど全て与えられているので辞書繰りに煩わされることはなく、英文には基本構造を示す記号と立ち止まる位置を示す番号が付されているので、最小限の語順変換ルールさえ知っていれば、どんどん自分で和訳を進めることができる。それゆえ英文の内容を楽しむことも可能になるのである。

こうして味わった楽しさや喜び、獲得した自信こそが次への意欲、新たに挑戦するエネルギーを生み出すのだ。寺島メソッドの神髄はまさにここにあると言ってよい。

6. 7. 2 さまざまな形で結実した「英語再出発」

暗記したものは頭から消えるが、こうして生まれた意欲は心に残って持続する。冒頭の節で、幾人もの人が二日間の授業が充実していたと述べるだけでなく「もっと学びたかった」と表明していた、と述べたが、そのことがわかる感想文の一部を紹介する。

「レ・ミゼラブル」大好きになりました。また今晚もユーチューブで「民衆の歌」を流しながら口づさみます。」

「今回の授業を（プリントを）勉強して録画した「レ・ミゼラブル」を観てみたいと思います。他の題材を使ってまた講座を開いてください。楽しみにしています。」

「今日は看護師の為の単位修得目的での参加でしたが、来年2月に国試が終了したら、改めて英語を学んでいこうと思います。」

「辛い時、私も民衆の歌を思い出して歌おうと思っています。テキストもたくさんカラーでわかりやすくしてあり、「レ・ミゼラブル」で学んで英語でスピーチできるようにしたいです。」

「普段から英語を使わないので英語の会話について怖さがあったが、これからは積極的に英語と関わっていききたい。」

「…それにしても今回改めてレ・ミゼラブルという作品の素晴らしさを再認識しました。コンサートや映画はもちろんですが、もう一度原作を1から読み直したいと思いました。」

「最後に英語力は日本語力の豊かさに影響されると言われましたが、現在「日本語リテラシー」を受講していますので、日本語も大いに学習したいと思います。」

「…もちろん楽しいだけでなく文法やリズムのポイント、また英語を知るには日本語を沢山知っていることが大切など、もう一度先生の授業で英語を勉強していききたい気持ちになりました。レ・ミゼラブルはぼんやりとしか知らない作品でしたが、本当に感動しました。良い作品を知り得たことは大きな収穫でした。家に帰ったら、今、小学生の孫に先生の話をして、そして家族にはレ・ミゼラブルを観せたいです。」

これらの作文を読んで興味深いのは、それぞれの受講生がそれぞれ自分なりの意欲を語っていることである。「民衆の歌をもう一度歌いたい」から「英語でスピーチしたい」「原書を読みなおしたい」、さらには「レ・ミゼ」だけでなく他の教材も学びたい、また英語にとどまらずに「日本語をもっと学びたい」という声までである。また、最後の文には少し驚ろかされた。まさか、今回の授業がお孫さんの教育にまで資することになるとは思いもよらぬことだったからだ。

このように受講生の英語「再出発」がさまざまな形で結実したことの意味は大きい。というのは、この成果はテストで計れる知識の量が増えたこととは質的に明らかに異なるからだ。知識量は静的で発展性がないが、学習意欲は異なる。それには動的な自己発展性がある。ゆえに自分で知識を増やしていける。つまり教師は必要なくなるということである。

もちろん私は「知識」を全く与えなかったわけではない。音法と文法の重要な法則を教

えて、発音のしかたや英文の読み方を理解させた。また英語力と日本語力の関係や語学習得に必要な人間力についても語った。つまり「学び方」という知識は教えたのだが、単語や熟語をこれだけ覚えなさい、と言ったり、それを確かめるためのテストをやったりはしなかった。しかし、いや、それゆえに受講生はもっと学びたくなったのである。

教師はしょせん授業時間内ですべてのことを教えることは出来ないのだから、「学び方」さえ教えればあとは「その気」にさせればいいのである。寺島先生は昨年 11 月の和歌山県であった講演会の中で「英語で授業」に触れたときに次のように語っている。「文科省や教育委員会は「EFL 環境では英語に触れる機会が少ないから、せめて授業の中でたくさん英語にふれさせたい。だから「英語で授業」なのだ」と言うが、今は昔と違って生の英語にふれる機会は無限にある。教室の外にはラジオ、テレビ、洋楽 CD、洋画 DVD、インターネットなどなど。だから授業で「もっと学びたい」と思わせることができれば、あとは生徒は勝手に走り出して英語にたっぷり触れられますよ。だから、結局は「動機付け」がすべてなんです」。

これは小学校に英語を導入するときにも感じたことだが、文科省や教育委員会の言うことは結論が先にあってその理由を後付けしているような気がしてならない。だから視野が狭く近視眼的なこじつけになって教育現場を混乱させるのだ。「教室の中だけ」「自分の教科だけ」「英語ができる生徒だけ」「会話のために会話だけ」という発想には次のような問題点があると私は考えている。順に言うと「言語環境の違いの無自覚」「英語力の土台を作る他教科への無関心」「全ての生徒を育てるという視点の欠如」「言語習得過程への無理解」である。

6. 7. 3 英語力をつける「最後の課題」

これまで何度も引用してきた感想文や授業アンケートは最後の 30 分間に書いてもらったものだが、そのときの様子も書き記しておく。この 2 枚の用紙を配布したとき私は「これは英語力をつけるために行うこの授業最後の課題です。自分の思いを用紙いっぱいになるくらいたっぷり日本語で書いて下さい」と言ったのだが、そのとき受講生の顔にはふふっと微笑むような表情が浮かんだ。「最後の」と聞いてほっとしたのか、それとも「日本語で」と聞いて私とその日の冒頭に話した話を思い浮かべたのだろうか。

私自身も授業がやっと「終結部」に入ったことで安堵と開放感にひたりながら、静かに鉛筆を走らせる受講生たちをながめていた。20 分ほどして最初に書き上げた人が現れたので「お疲れさまでした」と声をかけた。次々と書き終えた人が出て教室を退出していったが、そのときに何人もの人が私にお礼の言葉を述べるだけでなく「楽しかったです」「もう一回勉強したくなりました」などと自分の気持ちも、ひとことふたこと言い添えていかれた。私は本当にうれしかった。やっと肩の荷が下ろせた気がした。

このときには他にも印象に残ったことがある。窓際のグループのある女性は「ここで写真も撮ってもいいですか」と聞き私が「被写体の人が OK ならいいんじゃないですか」と答えるとグループ全員で記念写真をとっていかれた。またある別の女性は机の上に残されていた欠席者用の教材を「いただいていいですか」と尋ねてから持ち帰っていかれた。またこんな会話もあった。ひとりの女性と話しているうちにその人が仕事で英文メールを書いていることがわかった。「私は単純な英文しかかけないんですが、どんなふうに

したら上達しますか」と聞かれたので私は「返信は返ってきますか」と尋ねると「返ってきます」との返事だった。「それならちゃんと相手に通じて仕事ができるわけですから立派な英文ですよ。自信持って下さい」と私は言った。

最後まで残っておられたふたりの女性とは教室が閉まるときまで話が弾んだ。その中にはこんなやりとりもあった。「先生はこの教え方を他の若い先生には教えないんですか」「私の所属しているのは経営学部なので英語教師の卵はいません。でも今度、研究所主宰のワークショップでは講師をやります」「来年も先生の授業はありますか」「いやまだわかりません。英語の先生はたくさんいますから。依頼が来るといいですが」。(註⑤) 午後5時すこし前にその2人が教室を去り、私の面接授業はすべて終わった。

おわりに — 私の英語「黒歴史」は終わった！

本論を閉じるにあたってひとりの男性受講生の感想文を紹介する。これまで引用した作文はすべて一部分の抜粋であったが、これについては全文を紹介する。

私の学生生活において英語は「黒歴史」とも呼べるものでした。暗記が苦手な私は発音記号や文法(SV, SVO など)にとらわれ、義務教育から高等教育に至るまでの過程でずっと目をそむけてきたのです。

しかし社会人となり、仕事や旅行なりで多少なりとも英語に触れる機会は意外に多くあり、自分の世界観が広げられないことに葛藤を抱いていました。

今回、「再出発」という題目に目を惹かれ、右も左もわからない雰囲気だけでやりすごしてきた今までから脱皮することができるかもしれないという希望をもち授業にのぞみました。

とはいえ、「英語」はおろか「話すこと」も不安でした。しかし授業の題材として取り上げられた「レ・ミゼラブル」は、発音の韻や語順が歌として繰り返されていたこと、時代背景からか単語も理解しやすいものであり、「分かるかも」という自信を涌きたたせました。

特に授業で印象的であったのは、ストレスアクセントと語順が重要であること、枝葉がなくても相手には伝わるということでした。これを知ったとき、私のこれまでがなし崩されたような気持ちでした。「完全な形式」を求めて苦しんでいた学生時代から解き放たれた気分です。もちろん学問として追求するにはこれでは戦えないとは思いますが、苦手意識を解消するには十分なものでした。

今日学んだことを活かし、おそれずに立ち向かい、そして立ち上がること、興味をもって楽しさを見つけながら、英語に慣れ親しんでいこうと思うことができました。伝える気持ちを大切にしていきます。ありがとうございました。

この受講生の英語「黒歴史」は〈暗記〉から始まっている。これは現在の英語教育が抱える問題を端的に示してはいないだろうか。まず、入門期に英語学習者が覚えなくてはならないものを見てみよう。するとあまりに不規則でバラバラなものが多すぎることに気がつく。例えば、heatは「ヒート」でhead「ヘッド」に代表される発音と綴りの乖離、I, my, me, mineのようなそれぞれが異なる代名詞、am, is are や go, went, goneのように一貫性のない

不規則な活用、姿の見えなかった **do, does, did** が突然あらわれる否定文・疑問文などなど。これらを暗記することは精神の鍛錬にはなっても楽しんで学ぶ気持ちは起きない。

それらをまず覚えなくては英語学習は始められないのか？ 否！ 寺島メソッドは暗記させない。では何から始めるのかというと英語における「水源地」の習得から始める。英文法では「名詞＋動詞＋名詞」の語順、英音法では「リズムの等時性」がそれにあたる。

本稿ですでに述べてきたことだが、「音読」にはふり仮名が、「読解」には語義がつく。さらにしくみを視覚化する記号がつけられる。前者には音法の幹を示すリズム記号、後者には文法に幹である動詞と名詞に記号がつくのである。これがあれば、音読できて、和訳できる。たくさん音読すれば自然に英語らしいリズムで発音できるようになり、たくさん和訳すれば、英語の語順もわかるようになってくる。

私の放送大学・面接授業ではこのように「水源地」だけを学習目標と設定した授業をおこなって、この学生の英語「黒歴史」に終止符を打ったのである。(註⑥)

英文の中身についてもふれておきたい。第1節でこの題材「レ・ミゼラブル」を成人対象の授業で試してみたかったと述べたが、私の予想どおり 32 名の受講生はその魅力に心を動かされた。この授業を受けた若き英語教師も先に引用した感想文の後に次のように書いている。「また強く感じたのは力のある教材の大切さです。「レ・ミゼラブル」はタイトルを聞いたことしかなく、全くの初見でした。話が分かるか不安でしたが、気がついたら引きつけられていました。生徒にもこういうものに触れさせたいと思います」。

英語の授業は英語で教える中身に価値があってこそ真に生きたものとなる—このことを私は改めて実感している。(註⑦)

なお、今回の面接授業では、本論でもふれたように、寺島メソッドの創始者である寺島隆吉先生と寺島美紀子先生より、計画立案から授業設計に至るまでの全過程において惜しめない援助と助言をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。また岐阜学習センター所長の岡野幸雄先生にもお礼を申し上げたい。面接授業の初心者であった私の疑問や要望に対していつも丁寧に対応していただき、おかげさまで無事にこの仕事を終えることができた。

最後になるが、拙文がひとりでも多くの方に読まれて日本の英語教育のありかたについて活発な議論がおきることを願って本論を閉じる。(2017/06/20)

<註記>

1 私は寺島隆吉氏が主宰する「国際教育総合文化研究所」の研究員をしている。この研究所は寺島先生が岐阜大学を退官された後にそれまであった「英語教育応用記号論研究会」を発展的に解消して設立されたものである。研究所の研究分野は「英語教育」のとどまらず「国際教育」「平和研究」「文献翻訳」「教材作成」さらには「食文化」「健康法」「スポーツ」などにまで及んでいる。年に2回、研究集会を実施している。本稿で言及した研究集会は2017年3月17日～19日に行われたものである。

2 三つの「基礎教材」とは次の教材のことを言っている。ひとつはロシア民話「The Big Turnip」である。単純なストーリーだが、深い内容を持っている。文法的には「名詞＋動詞＋名詞」が繰り返し出てくるので「センマルセン」すなわち SVO の語順を集中的に学ぶことができる。ふたつめは「There's A Hole.」という歌である。同じリズムと同じフレ

ーズが繰り返されていくので歌いやすく、かつ非常に楽しい。文法的には「前置詞句による後置修飾」を集中的に学ぶことができる教材である。みつつめは英語の童謡「マザーグース」のひとつである「The House That Jack Built」である。これも同じリズムと同じフレーズが繰り返されていくので「リズムの等時性」を学ぶのに適した教材である。文法的には「関係詞の後置修飾」の構造を学ぶものである。寺島メソッドではこの三つの教材を英語学習の導入期に集中的に教えることを推奨している。〔なお、研究所ではこの教材を用いた教師向けのワークショップをこの8月に企画している。興味のある方は月刊誌『英語教育』か『新英語教育』の2017年6月号掲示板をご覧ください。〕

3 私の大学では2009年度から英語教師を対象にした「英語教育研究セミナー」という講演会を毎年おこなっているが、その第1回目は小松達也氏が講師のひとりであった。村松増美氏や國弘正雄氏らとともに日本における同時通訳の草分けとして活躍された方であるが、講演の中で「中学・高校では文法と読解だけでリスニングやスピーキングの訓練はしたことがなかった」「大学に入ってからESSで活動したり、ガイドや通訳、翻訳などのアルバイトをした」と話された。また昨年、講師をされた大井孝氏(日米会話学院院长)も「英語学習の土台は読解力」との考えを持っておられた。同学院のHPには大井氏と明石康氏(元国連事務次長)との対談があるが、その対談の中で明石氏は次のような興味深い話をしている。「英文学者の行方昭夫なめかたさんが著書『英文快読術』の中で書いている。新潟の雪深いところから出てきた小和田恆ひさしという男と、秋田の山奥から出てきた明石康という男は、大学に入ってきたとき、英語のえの字もしゃべれなかった。しかし、英語の基礎はきちんとやってきたらしく、その後、長足の進歩を示した」。小和田恆ひさし氏は皇太子妃雅子さんの父で国際司法裁判所の判事を務めた人である。ここで挙げた人たちは私のレベルとは比べものにならないので並べて論ずるのは失礼だとは思いますが、いずれにしても「読み書き」の土台がしっかりしていれば「話す聞く」は後からでも十分に間に合うということを示す例である。このことに関連して以下の図を山田(2016:221)より紹介する。これは寺島隆吉氏が2009年度の中中部地区英語教育学会・静岡大会シンポジウムで示した資料の一部であるが、外国語習得に関する「読み書き」と「話す聞く」との順序性、さらには母語習得と外国語習得の相違点がよくわかる。

母(国)語の習得過程	外国語の習得過程
自然な会話→文法の意識化 生活言語→学習言語 自然発生的概念→科学的概念	文法の意識化→自然な会話 学習言語→生活言語 科学的概念→自然発生的概念
聞く→話す →→ 読む→書く	読む→書く →→ 聞く→話す
自分の言いたいことを話す →自分の言いたいことを書く	自分の言いたいことを書く →自分の言いたいことを話す
「聞く」「話す」を土台に 「読み」「書き」を育てる	「読み」「書き」を土台に 「聞く」「話す」を育てる

二つの「言語の習得過程」 ©terasima2009

4 市川(2004)はアメリカで13年間、日本人駐在員の子どもと関わってきた筆者の実体験に基づいて海外で母語と共に第2外国語を獲得していく子どもの姿を明らかにしたもの

→ This is the malt that ϕ lay in the house that Jack built ϕ .

7 本稿で取り上げた実践は、教材選択や授業構成、評価方法などが比較的自由的な状況の中で寺島メソッドを追試したものであるが、このような条件には恵まれない中学校や高校であってもその理論を追試して教室の大きな変革を起こしている実例がいくつもある。その授業実践の詳細が山田(2016)に収録されているので関心のある方はご覧いただきたい。

<引用文献>

- 藤井健三(1986)『現代英語発音の基礎』研究社出版
市川力(2004)『英語を子どもに教えるな』中央公論新社
西永良成(2017)『「レ・ミゼラブル」の世界』岩波書店
寺島隆吉(1986, 復刻版 2016)『英語にとって学力とは何か』三友社出版
寺島隆吉(編)(1987)『The House That Jack Built』三友社出版
寺島隆吉(2000)『英語にとって音声とは何か』あすなろ社
寺島隆吉(2007)『英語教育原論』明石書店
寺島隆吉・寺島美紀子(編著 2001)『魔法の英語』あすなろ社
山田昇司(2005)『授業は発見だ』あすなろ社
山田昇司(2010)「外国語「アワード」から考えた「綴り字発音」とその理解度」『朝日大学経営論集』第24号 pp.13-27
山田昇司(2014a)「映画『レ・ミゼラブル』の授業デザイン」中部地区英語教育学会・山梨大会 自由研究発表原稿 2014/06/22
山田昇司(2014b)『英語教育が甦えるとき』明石書店
山田昇司(編著 2016, 監修・寺島隆吉)『寺島メソッド 英語アクティブ・ラーニング』明石書店

<添付資料>

- 1 放送大学・面接授業プリント 13頁「物語の読解プリント・No.1」
- 2 放送大学・面接授業プリント 11頁「英文法の幹・No.1」
- 3 放送大学・面接授業プリント 2頁「年表：『レ・ミゼラブル』の時代」
- 4 放送大学・面接授業プリント 48頁「民衆の歌：リズムよみプリント」
- 5 放送大学・面接授業プリント 表紙 「ドラクロア「民衆を導く自由の女神」」
- 6 放送大学・面接授業プリント 1頁「学習目標と教材リスト」

CHAPTER ONE

The Journey's End

¹Years ago I ²stole a loaf of bread (to ^{2'}feed) my hungry family. I ²was sent to prison and ³sentenced to hard labor. I ³traded my name for a number. I ⁴was no longer Jean Valjean. ⁵For nineteen years, I ⁵was known as number 24,601. ⁶That was a dark, lonely time for me.

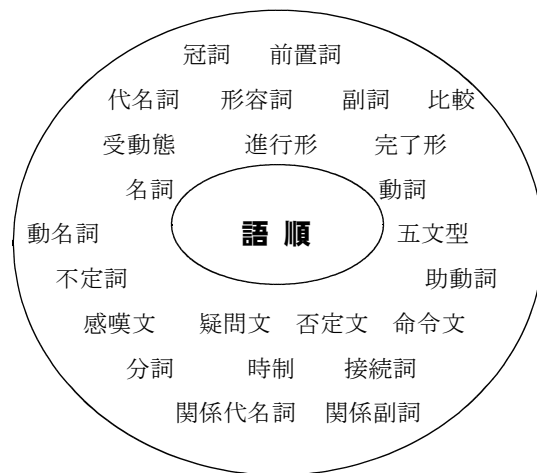
⁷Now I ⁷am old and dying. ⁸I write this for my daughter, Cosette. ⁹When she ^{9'}reads it she ¹⁰will know the truth. I ^{10'}hope she ¹¹can forgive me. I ^{11'}hope she ¹²will understand why I ^{12'}did not tell her everything sooner.

¹²At the time (my story ^{12'}begins) I ¹³was the breadwinner in my sister's household. ^{13'}Her husband ^{13'}was dead, and she ^{13'}had seven children.

- | | | |
|----|------------------------------|------------|
| 1 | years ago | 何年も前に |
| | stole | 盗んだ |
| | a loaf of bread | パンひと塊 |
| | to feed | 食べさせるために |
| | ◆ to は → (「心の向き」を表す矢印) と考える。 | |
| | 「盗んだ」ときに、心は「食べさせる」方向に向いていた | |
| | my hungry family | 自分の空腹の家族 |
| 2 | was sent | 送られた |
| | to prison | 刑務所に |
| | (was) sentenced | 刑に処せられた |
| | to hard labor | 重労働の刑に |
| 3 | traded | 取り替えた |
| | my name | 私の名前 |
| | for a number | 数字と |
| 4 | was | あった |
| | no longer | もはや～ない |
| | Jean Valjean | ジャン・バルジャン |
| 5 | For nineteen years | 19年間 |
| | was known | 知られていた |
| | as number 24,601 | 24,601番として |
| 6 | That | それ |
| | was | あった |
| | a dark, lonely time | 暗く、孤独なとき |
| | for me | 私にとって |
| 7 | Now | いま |
| | am | ある |
| | old and dying | 年老い死にかけて |
| 8 | write | 書く |
| | this | これ |
| | for | ～のために |
| | my daughter, Cosette | 私の娘コゼット |
| 9 | When | ～とき |
| | she | 彼女が |
| | reads | 読む |
| | it | それを |
| | will know | 知るだろう |
| | truth | 真実 |
| 10 | hope | 望む |
| | can forgive | 許すことができる |
| | me | 私を |
| 11 | will understand | 理解するだろう |
| | why | どうして |
| | did not | ～しなかった |
| | tell | 言う |
| | her | 彼女に |
| | everything | 全てのこと |
| | sooner | もっと早く |
| 12 | At the time | ～とき |
| | my story | 私の話 |
| | begins | 始まる |
| | was | あった |
| | breadwinner | 一家の稼ぎ手 |
| | in my sister's household | 私の姉の家で |
| 13 | Her husband | 彼女の夫 |
| | dead | 死んで |
| | and | そして |
| | had | 持っていた |
| | seven children | 七人の子ども |

- | | | |
|----|----|-----|
| 1 | | 9' |
| 1' | | 10 |
| 2 | 2' | 10' |
| 3 | | 11 |
| 4 | | 11' |
| 5 | | 12 |
| 6 | | 12' |
| 7 | | 13 |
| 8 | | 13' |
| 9 | | |

1. 英文法の学習項目はたくさんありますが、意思伝達のために大切なもの（幹）とそれほどでもないもの（枝葉）に分けることができます。それを示したものが右図です。いちばん最初に学ぶべき大切なもの、つまり英文法の「幹」は語順です。その他の項目は「枝葉」ですので「幹」をしっかりと学んだ後に学ばばいいのです。



2. その語順については、次のふたつが英語の大きな特徴になります。

- (1) 「名詞＋動詞＋名詞」
- (2) 「後置修飾」

3. 英文法の「幹」である語順を間違えるとこちらの言いたいことは相手に通じませんが、「枝葉」における誤りは文全体の意味を大きく損なうことはないので、話し手（書き手）の意図はおおむね相手に伝わります。

・語順が変わると、意味が変わってしまいます。

Cats (catch) rats. ネコはネズミを捕まえる。
 Rats (catch) cats. ネズミはネコを捕まえる。
 Cats [rats (catch)] ネズミが捕まえるネコ
 Rats [cats (catch)] ネコが捕まえるネズミ

・枝葉は間違えても、だいたいの意味は通じます。

I **goed** to * museum **by** my friends yesterday.
 活用形 冠詞 前置詞

私は行った 美術館へ 友だちと (?) 昨日

4. 物語「レ・ミゼラブル」の読解プリントに入る前に、まず英文法の「幹」である語順について説明しておきます。ここでは動詞に()、名詞に____、前置詞句に[] という記号をつけて英文の語順、つまり英文のしくみを示しています。

英語	日本語
(1) <u>Cats</u> <u>(catch)</u> <u>rats</u> .	<u>ネコは</u> <u>ネズミを</u> <u>(つかまえる)</u>
<u>Rats</u> [cats <u>(catch)</u>]	[ネコが捕まえる] <u>ネズミ</u>
← 後置修飾	前置修飾 →

『レ・ミゼラブル』の時代

四訂版 20170404

—— ビクトル・ユーゴーが生きた 19 世紀 ——

1780	ブルボン王朝 (1589-1792)	1769 バルジャン出生
	フランス革命 (1789-1799)	
	バスティーユ襲撃、人権宣言	
1790	男子普通選挙 (国民公会招集) 1792	
	第一共和政 (1792-1804)	ナポレオン誕生
	ルイ 16 世の処刑 1793	
1800	ブリュメール 18 日のクーデタ (ナポレオン執権) 1799	ユーゴー誕生 1802
	第一帝政 (1804-1814)	
	ナポレオンの大陸支配	イタリア遠征
		1796 徒刑場送り
1810	復古王政 (1814-1815)	
	百日天下 1815	ワーテルローの戦い 1815 出獄
	復古王政 (1815-1830) 立憲王政 有権者 0.3%	1819 市長となる
1820	農業人口が七割	
	ハイチに「独立債務」を要求 1825 (~1947)	1823 ファンチヌを救う
	アルジェリア出兵 1830 (~1962) 七月革命 1830	
1830	七月王政 (1830-1848) ルイ・フィリップ	
	有権者 0.6% 不作、物価上昇、コレラ渦 六月暴動 1832 死 1833	
	仏でも「産業革命」の胎動	
1840		「レ・ミゼラブル」
	凶作 1846、不況 1847 二月革命 1848	執筆開始 1845
	第二共和制 (1848-1852) 国王は不要で一致 男子普通選挙	八割完成 ~ 1848
1850	六月蜂起 1848 ルイ・ナポレオン、クーデタ 1851	
	第二帝政 (1852-1870) 産業資本家の時代に	ベルギー亡命 1851
	外征：クリミア戦争、アロー戦争、インドシナ出兵	
1860	イタリア統一戦争	執筆再開 1860
	メキシコ侵略	完成 1861
	普仏戦争 1870 (プロシアに降伏)	発売 1862
1870	第三共和政 (1870-1940)	仏に帰国 1870
	パリ・コミューン 1871 : 史上初の労働者による自治政府	
	資本主義経済の発展	
1880	帝国主義政策の推進：植民地の拡大	
	チュニジア、セネガル・コンゴに進出	
	ベトナム、カンボジア、ラオス、中国へも	他界 1885
1900	第一次世界大戦 1914 ~	

I

Do you hear the people sing,

トウ ユ ヒア サ ビーブル スィング

singing a song of angry men?

スイキング ア ソング オフ アンク リ メン

It is the music of a people

イトイ(ス)サ ミュジック オフ ア ビーブル

who will not be slaves again!

フー ウィル ノット ビ スレイブズ アゲイン

When the beating of your heart

ホウエン サ ビーティング オフ ユア ハート

echoes the beating of the drums,

エウ(ス) サ ビーティング オフ サ ドラムス

there is a life about to start

ゼア アイ ア ライフ アハ(ト) トゥ スタート

when tomorrow comes!

ホエン トゥモロウ カムス

II

Will you join in our crusade?

ウィル ユ ジョイン イン アウア クルセイド

Who will be strong and stand with me?

フ ウィル ビ ストロング アンド スタン トゥ ウィズ ミー

Beyond the barricade

ビヨンド トゥ バリケード

is there a world you long to see?

イズ ゼア ワールド ユ ロング トゥ シー

Then join in the fight that will give you the right to be free!

ゼン ジョイン イン サ ファイト サット(ウ)ル キープ ユー サ ライ トゥ ビ フリー

I Refrain

II'

Will you give all you can give

ウィル ユ キープ オール ユ キャン キープ

so that our banner may advance?

ソウ サット アウア ハナ メイ アドバンス

Some will fall and some will live.

サム ウィル フェール アンド サム ウィル リブ

Will you stand up and take your chance?

ウィル ユ スタンド アップ アンド テイク ユア チャンス

The blood of the martyrs will water the meadows of France!

サ フラット オフ サ マターズ ウィル ウォータ サ メドウズ フランス

I Refrain



楽しく学んで英語「再出発」

教材：映画「レ・ミゼラブル」(2012) より ♪「民衆の歌」 ♪「Look Down」

英文テキスト *Les Misérables* Victor Hugo

adapted by Monica Kulling (RANDOM HOUSE)



「民衆を導く自由の女神」 ウジェーヌ・ドラクロワ 製作年 1830年

この絵は1830年の七月革命を主題にして描かれた。1831年5月のサロン展に出品され、フランス政府は革命を記念するためとしてこの作品を3,000フラン（食費基準換算で約600万円）で買い上げたが、翌1832年の6月暴動以降、あまりにも政治的で扇動的であるという理由から、1848年の二月革命までの16年間は恒常的な展示は行われなかったという。ルーブル美術館収蔵。

6月暴動は「レ・ミゼラブル」終章クライマックスの舞台となった出来事である。また、女神の右前に描かれている少年は「レ・ミゼラブル」に登場するパリの浮浪児ガヴローシュのヒントになったと言われている。（Wikipediaより抜粋 画像は<http://www.gallery-aoki.com/saleminsyuu.html> から）

----- この授業の学習目標 -----

文法 語順（センマルセン、後置修飾）を習得する

音法 強弱のリズムを体得する

	教材リスト	頁番号
1	表紙	
2	教材リスト	1
3	資料 年表 1枚	2
4	資料 物語「ああ無情」 8枚	3-10
5	英文法の「幹」 2枚	11-12
6	物語の読解プリント 20枚	13-32
7	その全訳 14枚	33-46
8	英音法の「幹」 1枚	47
9	♪ 民衆の歌 リズムよみ 1枚	48
10	その語順訳 2枚	49-50
11	♪ Look Down リズムよみ 3枚	51-53
12	その群読シナリオ 1枚	54
13	そのフレーズ訳 3枚	55-57
14	資料 「レ・ミゼラブル」 あらすじ 1枚	58
15	資料 「レ・ミゼラブル」 解説 2枚	59-60